

# 墓標は語る

山本文子

私は日本の国をこよなく愛していたから、日本を悪く言われるのは不愉快だった。ところが、日本が嘘だらけの国であると思つたいまは、日本に対して腹立たしさばかりが先立つ。悪く言われて当然と思えることばかり。日本は先進国の中で一番嘘の多い国かも知れないと思う辛さ。そう思わせるきつかけとなったのは墓標だった。その経緯をできる限り詳しく正直に書いてみたい。

## 墓地の移転

夫も私も春日井出身のため、これまで夫の墓は春日井にあった。ところが、成人した息子や娘が次々と遠隔地の関東や関西に家庭を持つたため、春日井までの墓参が容易ではなくなった。そこで

思案の末、思いきって交通便のよい所へ墓を移すことにした。幾つもの候補地を見てまわった末に選んだのは、名古屋の平和公園のど真ん中にある墓地だった。バス停から徒歩三分、わきに駐車場もあるという条件が気に入った。ここなら私にとっても春日井の墓地より遥かに交通便がよくて助かる。

墓地を移転したことによって、私の前に思いがけない運命が広がりはじめた。あ、それを語る前に一つだけ説明しておきたいことがあった。夫は四男なので、春日井の生家を継いだ長兄一家が先祖代々の墓と共にニューギニアで戦死した次兄の墓を守っていた。まだ若かったときに、私はその墓参に行き、なにげなく墓標の文字に目をやると、「あつ」と思った。なんと次兄の戦死した月日

は私の娘（長女）の誕生日だったのである。三百六十五分の一の偶然とは珍しいな、と思っただけで、その時はそれ以上のことは何も考えなかった。それがいまになって大きな意味あることとして私の意識にのぼり始めたのである。

## バス停横に戦没者墓地

名古屋平和公園墓地への交通便の良さが嬉しくて、私の墓参がにわかに関心になった。とはいえ、ふだん地下鉄に慣れきった身にはバスの待ち時間がいさか退屈ではあった。周囲は右も左も見渡す限り、墓の行列だ。高台になっていて緑も多く、まるで墓の団地といった風情である。

帰りのバスを待つ間、私はベンチに腰かけて、あちこちを眺めまわしたり、立つて行って墓地を囲んでいる柵によりかかって柵の近くに立つ墓標の文字に目を凝らしてみたりした。

柵に近い位置の墓地は、ちよつと周辺のそれとは異なっていた。幼児ほどの背丈の小ぶりの柱が、これも小ぶりの四角いコンクリート台の上にちよつと立っている、という粗末な墓標が整然と五百基ほど並んでいる。脇に「戦没者墓地」の表示があるがその姿には、まるで高級住宅地の隅っこにある貧民街を連想させる侘びしさが漂っていた。

或る日、墓参帰りのバスを待ちながら例によって柵に寄りか

かって漫然と小さな墓標を眺めていた私はそこに「大正」の文字があるのに気づいた。「えっ、大正？　ここは戦死者の墓地でしょ。どうして大正なの？　大正時代に戦争など無かった筈なのに」好奇心が頭をもたげてきた私は、柵に沿って入り口へまわり、初めて戦没者墓地へ足を踏み入れてみた。

小さな墓標が集団になって立っているところから少し離れた位置には、対照的にでっかくて一基が畳一枚くらいの大きさで、趣のある形に変化させた立派な碑が数十基並んで建っている。土地も庭先ほどの余裕を持たせた面積を占めていた。確認するまでもなく、それは位の高い軍人の碑であり、当然ながらこちらの小墓標は兵士たちに違いない。人間社会の格付けがこんな形で墓にまで持ち込まれていることに、私は義憤を覚えた。かつて戦時中に見慣れていた軍服姿の若い兵士たちの姿が、忽然と脳裏に蘇ってきた。

この人たちは一体、いつ、どこで戦争で亡くなったのだろう。私はどうしても知りたい。苦むして読み取れない文字を指でなぞったりして調べてみると、意外にもほとんどが明治らしい。しかも十年、十一年、十二年とのべつ幕なしなのが不思議である。このままでは終われない心境になってしまった私は、五百基はある墓標の戦没年月をぜんぶ調べてみよう、と思いついた。一日や二日では無理だから、出直すことにした。筆記具も必要だ。暑く

も寒くもなしの好天の日を選び私は数回足を運んで、墓標を順番に一つ一つ念入りに調べていった。折れて頭のなくなつたものや苔に覆われてしまつてどうしても読み取れないものもあつて、結局、五百三基のうち、戦没年月の読み取れたのは三百八十五基であつた。

**墓標から謎が生まれた**

調べ終わった結果を表にまとめた。ひと目で分かる形のグラフにしてみたところ、なんと、明治十年から始まつて、四十三年まで毎年切れ目なく多数の戦死者が続いているではないか。なぜ？ どうして？ おかしいではないか。

明治時代といえは、二十七、八年の日清戦争と、三十七、八年の日露戦争しか知らなかつた私としては意外でならない。この二つの戦争の分は除いて考えることにしよう。この墓地に立つ墓標は昭和八年を最後としており、明治、大正、昭和初期までという限られた期間の戦没者であるが、明治四十三年を境にしていっぺんに戦没者が減つたことには何か意味があるのではないか。考え巡らせて浮かんだのが伊藤博文がこの頃に暗殺されたことだつた。伊藤博文の死亡が、日本の歴史の流れを変えたのか。彼はそれほどに大きな存在だつたのだろうか。私は彼を追つてみようと思ひ立つた。

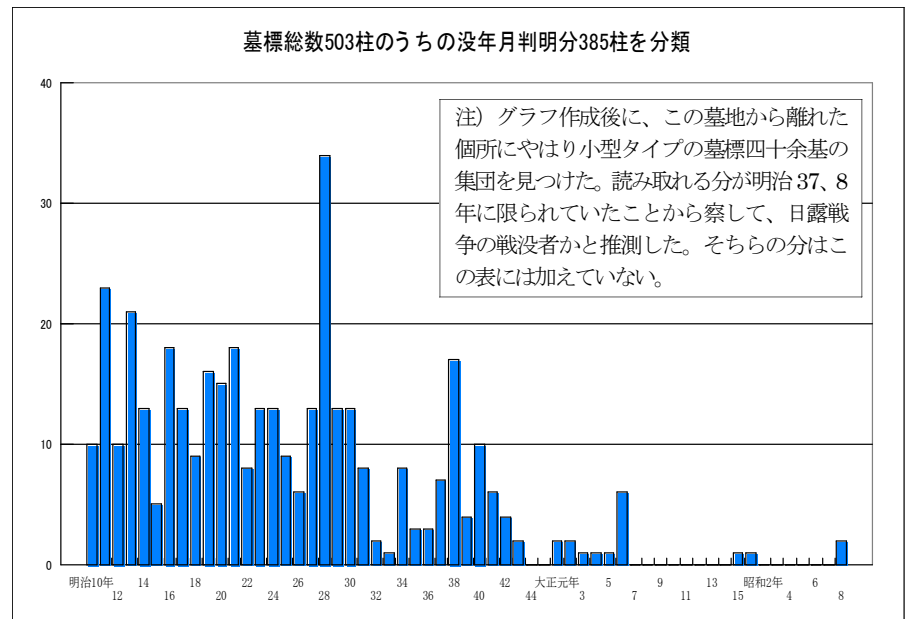
古書店で見つけ出したのが齊藤充功著『伊藤博文を撃つた男』であつた。まず、表紙の左上には撃つた男、安重根の写真が、右上には伊藤博文の写真が載つている。それを見比べてみた。「目は口ほどにものを言う」と言われるが、犯罪者の確認はその目を見るのが一番だと私は信じていた。見れば見るほど安重根の目は澄みきつている。それに対して伊藤博文の目には複雑極まりない翳りがある。安重根は根っからの正義漢だと私は直感した。本の内容を読み進むに従つて、その確信がいつそう強まつていった。非は伊藤博文にあることを、この本は暗に示してくれていた。

**問題は明治維新にあつた**

伊藤博文が中心となつて立ちあげた明治政府であり、大日本帝国だ。それは明治維新によつて誕生した国家である。となると、明治維新に注目する必要がある。私は明治維新について調べてみる気になつた。

新古書店やインターネットで、明治維新に関する本を探しまわつた。そしたら、あるわ、あるわ、明治維新の偽りを暴く書がぞくぞくと・・・。

最初に手にしたのは、一九九七年に初版が刊行された鹿島昇の書『増補版・裏切られた三人の天皇―明治維新の謎』だつた。孝明天皇と睦仁親王が暗殺され、別人・大室寅之祐が睦仁親王の替



え玉として明治天皇となつた、という思いがけない真相が暴露されていた。この書のために著者は暗殺されたそつである。

となると、書かれたことは事実には違いないし、想像を超える悪質な犯罪組織の存在が臭つてくる。出版社を乗っ取られ、再出版を阻まれた状態にあつたのち、著者の友人・太田龍氏が奮起して二〇〇七年、本書の再出版を実現させた。効あつて、明治維新の真相が世に知られ始めた。鹿島昇の書の内容の信頼性を高める種類の書が複数の人々によつて次々と刊行されるようになった。それらを照合しながら読み進むに従つて、私にはかなりのものが見えてきた。真つ先に思ったのは、明治維新がなかつたならば、日本は戦争を起こすような国にはならなかつた、ということである。

明治維新という犯罪の成就是、大日本帝国という殺人国家を誕生させてしまつた。明治から昭和敗戦までの大日本帝国の足跡を辿つてみれば一目瞭然である。戦没者墓地の墓標から生まれた私の謎が、解けるところまではいかないが、明治政府にはまるで殺人鬼のような面があつたことを初めて知つた。台湾征討、日清戦争、北清事変、日露戦争、第一次世界大戦、濟南事変、満州事変、支那事変、太平洋戦争。明治から昭和敗戦までわずか七十年ほどの間にこれだけの戦いを繰り返して、国民に多大の辛苦を舐めさせてきたのだ。さすが天皇を暗殺してすり替えるという大罪を犯して立ち上げた政府だけのことはある、と言えよう。

百済人が天下を取った明治維新

明治維新にはさらなる秘密が潜んでいた。首謀者集団は土着民族ではなかったのだ。山口県の田布施という朝鮮人集落の出身者が主となり、鹿児島島の朝鮮人集落出身者がこれを援けて明治維新を起こしたのだ。すり替わって明治天皇となった大室寅之祐及び、安倍晋三首相の祖父・岸信介元首相、大叔父の佐藤栄作元首相と共に、山口県田布施の出身者だったのである（THE INKER『マスコミとお金は人の幸せをこうして食べている』参照）。私は血筋がいけない、などと言うつもりはない。帰化人であろうとなかろうと、同じ人間同士、上下などありはしない。血筋がいけないのではなく、血筋をこまかす精神がいけないのだ。百済系朝鮮民族の血筋を神の子孫だと偽って、日本国民をかきかした、その嘘つき精神に対して怒らずにおれないのだ。こうなると、歴史認識についても、中国や韓国側の言い分が正しいかも知れない、と思えてくる。更に広がって領土問題だって、どちらが正しいやら、と思えてきてしまっているのではないか。自分の国を信じられなくなる、とは何とも哀しいことだ。日本国家は、今からでも真実ありのまますべてを国民に告白すべきであろう。

彼ら百済人はどこから来たか

のではないかと錯覚するくらいにこの二つの国はそっくりである。二つの国の支配者が同じ民族・百済人だというのは、間違いない事実だと思う。この二つの国こそ、戦争好き百済人にとっての理想国家なのかも知れない。多分、そうであろう。韓国の元大統領金大中が百済人だとの説も頷ける。彼は日本へ亡命して身を隠していた時期があったが、受け入れた日本にも百済人がいることに意味を感じる。金大中が北朝鮮のボス・金正日とにこやかに抱き合った姿は印象深かった。小泉元首相も金正日と握手を交わした。互いの表情はちよつと硬かったけれども、小泉元首相の父祖も鹿児島島の田布施（山口県の朝鮮人集落と同名）という朝鮮人集落出身である。北朝鮮のボスが自ら会い、握手を交わす相手はだいたい百済人であることが多い、と聞く。それだけ血に対するこだわりが強いのだと考えられる。世襲制というのも、血族尊重の表われだ。日本も北朝鮮も共に百済人を世襲制によってトップに頂いている点が共通しているのは興味深い。これは注目すべき非常に重要な事実である。

加えて問題にしたいのは、植民地支配時代の日本政府のあり方だ。朝鮮北部と朝鮮南部に対する対応が違っていた。その理由が問題だ。政府は朝鮮北部の整備に非常に力を入れた。その証拠に植民地支配時代に、技術者や研究者及び資金の多くを朝鮮北部へ送り込んだ。まったく何もない所へ家、橋、鉄道など、様々な

朝鮮人集落がどうしてできたか、については朝鮮半島の百済の国が滅びたときまで遡らねばならない。植民地支配の時代にもかなりの数の朝鮮人が日本へ渡ってきて定着した。帰化した。しかし、支配層となったのは彼らとは別の時代に来日した集団だと考えた方が確かであろう。

遙か昔の六六〇年頃、朝鮮半島の百済の国が新羅と唐によって滅ぼされたとき、王子を核とする一万人近い百済人が集団となって日本へ亡命してきた。日本の天皇は彼らを温かく迎え入れて、複数の者に官職を与え、近江の広大な土地を与えて彼らを住ませた。まるで第二の百済国のような言われていた。その後、日本各地に朝鮮人集落が点在するようになった。ここで加えたいのは、あのルーツ不明とされていた藤原鎌足こそ、百済から亡命した王子豊璋その人だったことだ（関裕一『藤原氏の正体』参照）。素性を隠したまま、その一族は巧みに日本の支配者になりおおせてしまったのである。王子豊璋という人間の悪さを受け継いだ一部の子孫が日本にもたらした害毒は、測り知れない大きなものとなった。

大日本帝国と北朝鮮

実によく似ている二つの国。大日本帝国時代を生きた者だけに分かることだが、大日本帝国がそのまま復活して北朝鮮になった

建造物をつくったと書でも読んだが、赴任した技術者の夫人から直接聞いたことがある。それに較べて南部朝鮮に対しては冷淡で、逆に搾り取った。日本本土からも搾り取った。この不均等の原因はどこにあるか。日本と朝鮮を支配していたのは、日本人であったが、どうやらその精神は百済人であつたらしい。自らの祖国・百済の地または住民を優遇したということではなかったか。

百済人は、日本の先住民族を追い出した

私の猜疑心は膨れ上がっていく。

日本政府は国民を捨てた。「ブラジル移民も満蒙開拓団も移民ではなくて、棄民だった」と住井すゑは『住井すゑ対話集3』の中で語ったが、私も同感である。日本の人口が過剰だと言って荒地へ追い出し、辛苦を舐めさせた。敗戦になったとき、どれだけ多くの人が日本へ帰れないまま満蒙の地で苦しみながら亡くなったことか。私は星亮一著『満州歴史街道』を泣きながら読んだ。井出孫六氏が新聞や雑誌に書かれた文から長野が特に多く満蒙開拓団員を送りだし、中国残留孤児の悲劇を生んだと知った。日本政府は人殺し国家ではないか、と心に叫ばずにはおれなかった。どんどん移民させた一方では、労働力不足を理由に朝鮮半島から沢山の人を日本へ連行した。これはおかしい。先住民を追い出して朝鮮民族によって日本の国を埋め尽くしたかったのではないか。

私はそう疑っている。その疑いは現在も消えていない。日本の支配者であり続ける百済民族が私は恐ろしい。

### 大日本帝国は殺人国家だった

大日本帝国の残忍さは特攻兵器にはつきりと顕われている。片道燃料だけで基地を飛び立って行き、敵に体当たりして兵器もろとも自爆する、という世界に二つと例のない残酷極まりない戦術を、百済人は創り出した。それに乗って自爆していったのは土着日本人だ。

小学校一年の私たちが習得した教科書は「サイタ サイタ サクラガ サイタ」に始まって、「ススメ ススメ ヘイタイ ススメ」と明らかに軍国主義の開花であった。死んでも口からラッパを放さなかったキグチコヘイや爆弾三勇士の絵。大きな爆弾を三人の兵士が抱えて敵陣へ突っ込む。これはまさに特攻戦術そのものの姿を描いている。サイタ サイタ サクラは「敷島の大和心を人問わば朝日に匂う山桜かな」に通じる。日本人たる者は、桜のように。パツと潔く死ぬべきだ。命を惜しむな、の意味である。私が小学校二年のとき、支那事変が始まった。授業中に担任の小川百合先生が言われた。

「男の子たち、大きくなったら兵隊さんになって潔く死ぬのですよ。お国のために死ねますか」

### アジア制覇を狙った百済民族

一九四五年、日本が戦争に負けたとき、私は数え十七歳だった。大日本帝国を知るぎりぎりの世代ということになる。

大日本帝国は、聞くもおぞましい国であった。「忠君愛国、滅私奉公」をスローガンに私たちは辛苦ばかりを負わされた。人権無視。国民は牛馬と同じ労働力に過ぎない。小学生までが駆り出される。忘れもしない。小学校四年生の私たちは、軍馬の食糧にする干し草を夏休みの間に一人一貫目ずつ刈り集めて学校へ供出させられた。一口に一貫目というけれど、「ちわら」という草だけを採り求めて、家からかなり離れた堤防まで通い、刈った草を集めてそれを天日に干す。すると量が減ってしまう。子供の力でこの作業を続けるのは、大変なことだった。遊ぶ時間もなくなる。また、学校の授業時間に藁を持ち寄ってそれで細縄をなつたこともある。

女学校時代は学業をなげうって、工場で働き続けた。工場では月に二回の電休日があったけれども、その日は登校を義務付けられていた。神である天皇の尊さをしっかりと教え込まれながら、焼け跡整理や防空壕掘りに励んだ。戦いが激しくなると工場も学校も空爆を受けて焼失し、どちらでも焼け跡整理の仕事が山積みになった。工場で働いているときに、B29による集中空爆を受けて

一瞬、シーンと静まり返った教室。と、一人の男の子が呟いた。「ボク、死ぬの嫌だ」

それに力を得たように、教室は「死ぬの嫌だ」「嫌だ」「嫌だ」「嫌だ」の大合唱になったのであった。心密かに私は思った。男に生まれなくてよかった、と。あの情景、雰囲気は私は決して忘れることができない。戦う国、戦った国は世界のあちこちに存在するだろうけれど、あれほどしつこく国民、子供にまでも死ぬことを強要する国家は大日本帝国の他にはあるまい。どう考えてもおかしい。私はこだわり続ける。

戦没者墓地で墓標の文字をなぞっているときもこの情景と、男の子たちの大合唱を思い出して涙が滲んできた。私には、大日本帝国という国家は国民を一人でも多く殺したがっていた、としかどうしても思えないのだ。組織の中心にそういう願望を持つ権力者が潜んでいたに違いない気がする。食糧を補給できない広範囲の南方の島々へ兵士だけは次々と送り出した。作戦の拙さだと言われているが、果たしてそうだろうか。意図的に兵士を殺したがっていたのではないか。日本の軍規は捕虜になることを禁じていた。捕虜になるよりも死ぬ、と自決を促した。これがおかしいのだ。世界どこの国も捕虜を認めあい、互いの捕虜を交換の形で生還させていた。それを許さないのは日本だけだった。殺人国家と言わずして、何と言おう。

私たちは防空壕から逃げ出して田んぼの中を泥んこになって走った。敗戦になり、工場をひきあげて戻った学校は、運動場の真ん中に大きな爆弾の穴があった。教室の窓ガラスは全部割れて飛び散ってしまい、その後片付けに追われた。教科書なく、教科担任もない学校だから授業が成り立たなくて、学校生活は作業の連続の挙句に卒業式を迎えた。

冷酷な支配者のもとで老若男女を問わず、日本国民の誰も彼もが苦しんだが、不幸は日本国民だけではなかった。支那大陸、朝鮮半島、南方の島々の人たち、日本の敵国となった五十一个国家の人たち、合わせて五千万もの死者を出したことは、大日本帝国の恥ずべき足跡である。大日本帝国はこのようにとんでない国だった。

にもかかわらず、反省心なくて、性懲りもなく、また戦争のできる国を目指すとは。とても正気の沙汰とは思えない。どうしたら愚かな為政者を排除することができるのか。

日本を戦争を起ささない国に変えるためには、なぜあの戦争が起こったか、なぜ戦争を起こす国だったかを細かく、深く掘り下げて考えなければならない。

### 我が子たちの誕生日に意味があった

長女の誕生日が夫の兄の戦死した日だったことは冒頭に書いた

が、今になってそのことに私は意味を感じ始めた。戦死者たちの霊に導かれるように、墓標がきっかけとなった形で、次々と明治時代の歴史を調べ始めた私に、ここで忽然と蘇ったのが、義兄の祥月命日に長女が生まれたことの奇遇についてであった。あれは単なる偶然ではなく、義兄が私に訴えかけたくてこの偶然を起したのだろう。二十代の若さで、人生の楽しみを味わうことなく戦場に散っていった悔しさはいかほどであったか。

「俺たちをこんな目に遭わせたのは一体誰だったのか、調べてくれ。力を貸すから調べてくれ」

と叫んでいるに違いない気がしてきたのである。

誕生日の不思議な一致は長女に限ったことではなかった。次に生まれた息子も、その次に生まれた末娘も、因縁の深い日に生まれていたのだ。それに気づかせてくれたのは、末娘の言葉だった。或る日、末娘が言った。

「お母さん、お兄さんを憲法記念日に生んだのも不思議な偶然だね」

言われてみれば確かにその通りである。正真正銘五月三日の午前零時四十分に生まれた。予定日より二日早かった。現在の私は九条を守り抜きたいとの情熱をたぎらせているので、佳き日に生まれたものよ、と思う。国民の命を軽視する支配者の下での九条の精神骨抜きはいかに危険極まりないことか。戦争を体験した世

代には痛烈に感じ取れるのだ。続けて末娘が言った。

「それだけではないよ、お母さん。私の誕生日だって意味がありそう」

「えっ、どういう意味が？」

「三月七日に生まれたから『みな』にしようと思ったけれど、『みなさん』と呼ばれたとき『皆さん』とこんがらがるから『なみ』にしたって、お母さん、言っていたでしょ。ところがこの『なみ』がすごい。『なみ』だったことで、私の名前には『みなもと』が入っているのだから。お母さんの先祖は清和源氏だと聞いているけど、その源が私の名前にはある」

「あっ、そうか。貴女の姓名を漢字で書いて、下から読んでみると『みなもとやま』になるね。『みなもと』が入っているなんてすごい。それに気がついた貴女もすごい」

この子の場合、出産予定日が来て陣痛促進剤を打ってもまったく反応なく、予定日より三週間も延びてのお産だった。もしも予定日通り二月に生まれていたら「奈美」と命名することはまずあり得なかったと思う。それだけではない。夫の兄妹たちはどの家庭も申し合わせたように二人ずつの子持ちである。ぶちまけて言えば、夫自身も子供は二人までと決めていた。それを子供好きの私が押し切った末娘の誕生だった。夫の反対は生半可なものではなく、何日も口をきいてくれないかと思うと、今度は逆

にぶりぶり怒り散らす、当り散らすという抵抗を見せて、私に中絶を迫った。が、私はしぶとく堪えた。

末娘をなんとかして現世に送り出そうとした先祖たちの、必死な力が私を応援してくれたに違いない。

それほどまでにしてなぜ、先祖は末娘を現世に送り出したか。

何気なく命名したのに「みなもと」だったことから推察して、ようやくそこに私は霊たちからのメッセージを読み取ることができた。

「我がミナモトの子孫よ、どうか二人で力を合わせて明治維新の悪業や百済民族の野望を世に広めて、日本国民を百済民族の毒牙から救い出してくれ」そう訴えているように今は思えてならない。それに応えるべく、私は老体に鞭打ちつつ、必死にこの原稿を書き進めてきた。原稿そのものは百パーセント自分だけの力で書いているというものの、パソコンへの打ち込みとか、歴史について私の無知を補うなど、助手になったり師になったりしてくれる末娘。私は大助かりである。

### 明治維新、昭和維新、そして平成維新

二・二六事件は昭和維新とも呼ばれていた。その首謀者は明治維新同様に山口県出身者だった。平成の今また維新の会が登場

大阪、東京、名古屋と明らかに右傾組織が大都市を狙っての扇動

だった。維新を名乗るからにはやっぱり、二つの維新と同列の組織が絡んでいるに違いない。つまり百済民族。思っていた以上に大きく組織化されているということかも。

彼らの目的は明治維新でつくった大日本帝国を復活させ、日本国民を使って、百済の仇討ちを果たすことであり、アジア制覇が最終目的であろう、と私は推測する。彼らは個人ではなく、百済系朝鮮人による非常に大きな組織として隠れて存在し、常に再起の機会を狙っている。維新の会登場は私にそう感じさせた。単なる私の疑いに過ぎないのならよいが、当たっていたら恐ろしいことだ。日本国民の未来はどうなるか。

### 日本の国を構成する民族

日本を構成しているのは、アイヌ人、琉球人（沖縄人）、加えて大和民族、これだけの土着民族ばかりであり、日本は単一民族だと子供の頃の私たちは教えられた。ところが、大違い。もう一つ、百済人という民族が日本の仲間だった。いや、仲間どころか、血筋をこまかした狡い支配者だった。つまり百済人という存在をひた隠しにし、大和民族になりすましていたのだ。この中で土着民族でないのは百済人だけ。彼らの先祖は六六〇年頃、朝鮮半島の百済の国が滅びた時、日本へ集団で亡命してきた一族だった。亡命、渡来というのは土着と較べものにならないほど大きなエネ

ルギーを要する。それを乗り越えてきたからには、かなり荒っぽい活動家と考えられる。

何人種であろうと、帰化すれば同じ日本人だ。仲良くすればいい。ところが、この氏族は支配欲の強烈さ、策略好きにおいて他に類を見ない、卑劣極まりない氏族だったのである。それが明治維新という犯罪によって、日本の国の支配者にのし上がってしまった。彼らにとつての理想は大日本帝国だった。敗戦によっていったんは民主化されようとした日本を再び引き戻して、大日本帝国再建を夢見ている彼ら。憲法九条改正、核武装が夢実現への第一歩である。

### 温かかった中国 アメリカ

敗戦から七十年近くも経った今頃になって、しきりに思い出すことがある。完全に敗北した日本の国に対する、それまで敵国だった国々の態度について、だ。

当時、私の兄は軍人として満州に配属されていた。この兄が八月十五日戦争が終わった後すぐ、九月早々に突然元気な姿で復員してきて、家族をびっくりさせた。その後の新聞記事によって知ったことだが、クリスチャンであった蒋介石総統は「仇を恩で返す」と言って、敗戦と同時に日本兵を帰還させた。中国兵たちは地団太を踏んで悔しがりながら、その指示に従った、と聞いて

いる。

また、占領した日本を見てアメリカの偉い人が驚きの声を挙げた。「日本人は働き過ぎだ。体が壊れる。もっと休みなさい」それを新聞で読んで私は思わず涙をこぼした。なんと優しく温かい言葉だろう。私の国・大日本帝国の偉い人たちは「死ぬ、死ぬ」とは言っただけで、「体が壊れる」なんて「休め」なんて一度も言っただけでなかった。

ここで思うことは、中国もアメリカもその支配者は、当時の日本の支配者とは大違いに人間らしい心の温かい姿で浮かび上ってくる。冷酷だった大日本帝国が、果たして本当に正義の国だったか？ 人情家の中国、アメリカが悪かったとは、信じられないではないか。どちらが正しくてどちらが間違っていたかについて、考えさせられる。

話のついでに加えておこう。心の温かいアメリカがつくってくれただけに、昭和憲法は戦争を食い止める大きな力になった。九条の骨子は得難い宝だと私は思っている。

### 地獄のような軍隊生活

少女時代に、治療を受けに行った歯医者で軍服の兵士に出会った。小牧飛行場に内地勤務する兵士らしくて、三人揃って順番を待っていた。上官に頬を殴られて奥歯がガタガタになったための

治療だと話し、耳をぶたれて聞こえなくなった兵に較べればマシだと言った。小学生の私たちですら先生からぶたれる時代だから、兵隊さんは当然だろう、ぐらいにしかこの時は思わなかった。

ところが、兄が十三歳で陸軍幼年学校に入学したことによって、私は初めて軍隊生活の厳しさ、恐ろしさを知らされた。上官の手柄にもよるだろうが、軍隊のお仕置きは生半可なものではなかった。動作が鈍い、寝起きが悪い、整理がよくない、と実に些細なことでも殴る、蹴るの拳句、失神すると水をぶっかける、などは日常茶飯事。体罰が過ぎて死亡しても戦死扱いである。

天皇が神だった時代、身の回り品はすべて天皇からの御下賜品ゆえ、損ねたり紛失したりすれば半死半生の目に遭わされた。兵士の命は物品より遥かに軽かったのである。兵士に限ったことではない。すべての国民に、人権など与えられなかったのである。

慰安婦問題にしても、慰安婦が存在したか、しなかったかではない。慰安婦を人間として扱ったか、道具として扱ったか、の違いが国際的に問題にされるのである。大日本帝国がいかに残酷だったかは、戦争を知らない世代には到底分かりっこない。南京大虐殺にしても、慰安婦問題にしても、当時を知らない世代は、口を挟まない方がよいと思う。

### 軍隊生活で人が変わった兄

金剛山の麓にあるという大阪陸軍幼年学校生になった兄は、夏休みと冬休みしか帰ってこなかった。兄の後ろについて、魚すくいや蟬取りをする楽しみを奪われて、私はいつべんに寂しくなった。晴れて鈴鹿山脈がくつきりと見える日には「兄ちゃんはこの山の向こうにいるのだなあ。会いたいなあ」と思っっては山脈を眺めた。

敗戦になって帰還してきた兄は、すっかり人が変わっていた。六年間の軍人教育に加えて、純粹な青年にとつては戦争に負けた悔しさが加わり、自分の気持ちを制御できなかったせいもあると思うが。

或るとき、母に口答えをした私は、すっ飛んできた兄によって水辺へ引きずっていかれ、顔を水中に突っ込まれた。息がきなくて苦しいのなんの。死ぬ思いだった。弟も同じ目に遭わされた。この体験によって、軍隊生活のお仕置きの怖さが分かったのである。兄は、軍隊生活の影響が抜けたらしくて、やがて普通にやさしい人に戻ってくれたけれど。

### 農民一揆・九年間に三百五件

いや、もう、驚いたの何の、私の直系先祖が同志と共に明治政府に桶ついていたとは。小学館刊『日本の歴史24 明治維新』（一九七六年）記載文によって初めて知った。

幕府とは比較にならない過酷な税を課す明治政府に国民の怒りが沸騰。士族からも、農民からも、日本全国津浦に亘って一揆が起こった。その件数たるや、物凄い。農民一揆は明治六年から十四年まで九年間が最も多く、計三百五十回も起こっている。しかも、その抗争が全国一に激しかったのはなんと愛知県春日井郡だというのだ。それは現春日井市、つまり私の故郷である。

村議員や村の地主一同が協議して、県の作成した収穫分賦書拒否を決定したのが始まりだった。この運動は全国へ広がっていった。ここで思い出したのは、娘時代の私が地域に古くから住む老人からしばしば聞かされた言葉である。

「貴女のご先祖さんは偉い人じやった。とても堅いお家で、地域のためにいつも一生懸命奔走された」

その言葉から察して、我が先祖が急先鋒だったとしても不思議はない気がする。年代からいうと私の曾祖父の活躍であろう。曾祖父といえは十二代源三郎である。私が自分の守護霊に思える、と既刊拙著の中に書いたのが、その人だ。

春日井郡の村民が立ち上がったのは明治十年六月二十二日。あつ、ここで妙な偶然に気づいた。あの憲法記念日に生まれた我が息子の、その長男の誕生日が六月二十二日だ。先祖の霊には、ひよつとしたら子孫を望む日に出生させる力があるのだろうか。

翌十一年四月にかけて四十三カ村へ拡大し、更に他の三十カ村にまで影響していった。協議に協議を重ねたが、県の改正事務局ではらちが明かないと悟って、愛知県の農民たちは東京へ代表を送った。この代表の帰郷を何と二万余の農民が出迎えたという。人間の溢れる都会とは違って、村民の二万人とは凄い数である。生活と命をかけた農民の必死な思いが伝わってくる。だが、東京の官側もまた冷淡だった。

怒った農民達は遂に天皇への直訴を決定した。直訴しようと思つた農民の数四、五千人にのぼった。だが、これも官側の圧力で不発に終わった。圧力どころか脅迫だった。曰く、「分賦書拒否は至尊である天皇への反抗だから、皇国に居住する権利はない。アメリカ、ヨーロッパなど、海外へ出ていけ。さもなければ分賦書を受け入れよ」と言う。なんと冷酷な恐喝だろう。

### 曾祖父・源三郎からのメッセージ

ここまで書き進めてきたところで、不意に強烈なものが私の胸に突き上げてきた。「オレ、オレ」俺、俺、呼びかけの言葉？ 曾祖父であろうか。私が守護霊と思っている曾祖父、その人の意志らしいものが伝わってきた。叫びと言おうか。私はそれに従ってペンを走らせるしかない。かなり強い語調だ。

### 歌会始がきっかけになつて

この孫息子が生まれたからこそ、私は宮中歌会始へのご縁を頂くことになった。ずつと昔二十代のころに、三年間ぐらい短歌に凝ったけれど、それきりで短歌を忘れ果てて暮らしてきた私だった。それが、孫息子が生まれた嬉しさからであろうが、珍しく一首を作った。出産で嫁が入院の間だけ手伝いに行っていて、孫娘と一緒に洗濯物を干していたら、ひよいと浮かんだ一首。

我が孫と 空の青さをほめ合いつつ 洗濯物を干し終えにけり  
手直しだの推敲だのは一切せず。幼稚ではあるが、しかし佳い歌だと思つた私は、たまたま翌年の歌会始のお題である「空」の字が歌の中にあるがため、詠進する気になった。初詠進である。まさか入選するとは夢にも思わなかったので、内定通知を受けたときは本当にびっくりした。

初めて参上した宮中では、いまだに天皇が神扱いされていることに違和感を覚えた。だがその反面、天皇はじめ皇族方の自由のなさはとても痛ましく思えて、それ以来私は、なぜ天皇制があるかについて真剣に考え続ける人間になつてしまつたのである。

### ふたたび農民一揆について

農民一揆に話を戻そう。県の作成した収穫分賦書拒否の運動は、

……農民の辛苦を分かうとしなかつたお役人たちに一言申し上げたい。最後の恐喝文、あれは実に酷い。渡来民族が先住の土着民族に向かつて「出ていけ」とは何事か。お前たちは自身が渡来であることをひた隠しにしておるが、隠蔽そのものからして大問題だ。日本の国を乗っ取るという野望があるから隠蔽が必要だったのだ。この機会に、後世の識者たちの審判を仰ぐじゃないか。これを読んだ日本人の一人一人に考えてもらおうじゃないか。

アメリカかヨーロッパへ行け、の一言でお前たち百済民族の本音が丸見えになつたぞ。なぜ、アジアの隣国ではなくて、アメリカ、ヨーロッパなのか。アジア全域を百済民族のものにしようと考えておる野心の大きさが分かつたぞ。

「日本の土地は、俺たち百済民族がもらつた。先住民のお前は邪魔だからさつさと他国へ行け」というつもりだろうが、そうはさせぬぞ。我が日本の国を百済民族に乗っ取られたまま黙つてひつ込むわけにはいかないのだ。俺の力で必ず、必ず、日本国民にお前たちの野心を気づかせてみせるぞ……」

以上を曾祖父からのメッセージとして、私は受け止めた。アメリカかヨーロッパへ行け、の一言からアジア制覇の野望を見抜いた曾祖父の眼力のなんと鋭いことよ。(註)ところで、この「オ



レ、オレ」の呼びかけを受けたのは、曾祖父の祥月命日七月十九日の頃だった。二、三日経ってから「あつ」という思いでそれに気づいたので、あわてて註を入れることにした。

さて、話を戻して、農民一揆は岡山、徳島、石川、福井、長野、福岡、和歌山、茨城、三重、岐阜、などなど、全国いたる所に続発。官側によって謀殺されたり、処刑された人数五万余名とは、何と恐ろしい国だろう。

ここで、ふと私の脳裏に蘇った母の言葉がある。

「この地区はなあ、所有農地をお上に申告するに当たって、真つ正直にそのまま届け出た。ところが、よその地区は実際よりも少なく申告するのが常識になっておつたらしい。闇の土地を持たない者は資産が多くても生活が苦しかった」

そうだったのか。正直者は馬鹿を見たというわけだ。母の言葉から私は我が先祖を、激しい農民一揆に駆り立てた理由が分かった。生一本、真つ正直、正義感の塊のような先祖の姿が浮かんできた。それに対抗した官僚の冷酷ふりは腹立たしいが、しよせん薩長（百済）人の冷たさだった。その体質は明治維新が生んだものであった。明治政府の構成を見ると、ほぼ七十パーセントを薩長（鹿児島県、山口県）が占めていた。大臣長官は言うに及ばず、次官地方役人に至るまで薩長だった。旧和歌山藩出身の睦興宗光（大蔵少輔心得）は次のように嘆いている。

「今や薩長の人に非らざれば、殆ど人間に非らざる者の如し。豈嘆息すべき事に非らずや」

この明治政府は名を連ねるのは薩長が多かったけれども、内実には旧幕臣層の力が大きく働き、その知恵に支えられて明治国家の基盤がつくられたのであった。

#### 日本イコール百済

韓国の数学者・金容雲著『「日本イコール百済」説』を読むまでもなく、明治維新が百済人による天下取りだったし、天皇も百済人でいらつしやるから、いまの日本は百済国と言われても否定できない。百済人だからいけないなど言うつもりはないが、百済人の血ばかりが尊ばれ、政治家、官僚、マスコミ、経済など多くの面で、能力優先であるべきところを、百済系優先の社会に作り変えられてしまった。例を挙げれば、勲三等までは朝鮮人で占められているとか、官公庁の中には、本籍が朝鮮人集落でないとして出世コースに乗れない省庁があるなどと言われている。

策略家で闘争好きの百済民族が、温厚実直な大和民族を抑えて、その能力を潰すことは、決して日本の発展につながらない。アジア平和のためにもならない。

#### 住井すゑの言葉

図書館のリサイクルで思いがけなく手に入った『住井すゑ対話集3』は考えさせられることが多かった。住井すゑの頭脳の鋭さは驚嘆に値する。一九〇二年、奈良県に生まれた彼女は、地域の長老たちと共に橿原神宮や天皇御陵が根拠のない土地に造られていくインチキをしつかりと見据えながら育った。全国から大樹を集めて境内に移植し、紀元二六〇〇年の祝賀が催されたこと、歴代天皇の名が明治に作られたことなどから、住民たちは天皇制のごまかしを充分に知り尽くしていた。だが殺されるのを恐れて口には出さない。才知と正義に溢れる彼女は「偽り」と「言えば殺される」ことを容認できなくて、逆に批判精神を高めていった。

一九九四年に、フィリピンのF・シヨニール・ホセとの対話で、住井すゑは次のように語っている。

「天皇制思想というのは、もう最悪のものです。これで日本人そのものも不幸になるし、周辺も不幸になる。世界に災いを及ぼすものは天皇制ですよ。日本からこれを取つてしまえば、日本という国はすばらしい民族の国だと思います。」

この対話集が刊行されたのは一九九七年である。二〇一三年のいま、これだけのことを口にしたら無事ではすむまい。殺されるか、社会的に葬り去られてしまうであろう。第一、書の刊行も難しかろう。それは何を意味するか。いま、またもや日本は策略家に完全にのさばられてしまった。つまり、かつての戦争直前と同

じ言論弾圧。この後にはもつと重大な事態が待ち構えているというわけ。なんとしても食い止めねばならない。

策略は人を殺す。人を活かすのは叡知である。策略家を国家権力の座に置くのは危険極まりないことだ。叡知が策略を上手に抑えることができれば、初めて平和は守られていくのである。

(二〇一三年七月二十八日)